蜜の眠り

高橋昌男

蜜の眠り

高橋昌男

蜜の眠り

定価九五〇円

発行　昭和五十二年一月二十日
二刷　昭和五十二年三月二十五日
著者　高橋昌男
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

©1977 Masao Takahashi Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

蜜の眠り　目次

場末のにぎわい……5
藁のぬくもり……82
燃える岸辺……148

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

蜜の眠り

装画　加藤登美子

場末のにぎわい

酒場に関してかくべつ場末趣味があったわけではないが、あとになって思い出してみると、その頃勤めの帰りに頻繁に足を向けたノーブルにしろ鳥籠にしろ、いずれも新宿の中心街からはずれた場所にあった。もちろん会社の負担で客を接待するようなばあいには、街なかの体裁のととのった酒場を利用したが、会社の客と別れて一人になると、私はかならずといっていいほど、安くて気のおけない場末の店へ足をのばして飲み直した。

私は大学を出て三年目、神田にある中どころの広告代理店に勤めていた。ウィスキーを水で割って飲むのがはやりはじめた頃だ。

会社では何人かの仲間とともに、ラジオ・テレビ企画制作部の番組企画課というセクションに配属されていた。仕事というのは、民間放送局（おもにテレビ局だったが）に番組を提供している、もしくはこれから提供しようとしている何十という企業のために、それぞれの企業イメージを高めるような番組を新しく立案し、それを具体化させることだった。

ところが、これが思ったより厄介な仕事だった。広告主であるそれらの企業がすべて私たちの会社の顧客である関係上、番組企画課そのものが多分にサービス部門的な色合いをおびており、そのために不本意な事態がしばしば起ったのである。

たとえば広告代理業という会社の立場からいって、私たちはどうしても広告主の意に添うような企画を立てざるを得なかった。これは宿命といってもいいぐらいなものだった。するとその企画案をめぐって、実際の番組制作にあたるテレビ局側ときまって意見の衝突が起った。こんなときは私たちの会社の営業部員が意見の調整にあたるのだが、大抵は度重なる折衝の甲斐もなく流産するという結果に終った。まれに週一回の連続番組として放映されることになっても、それは最初の企画案からは想像もつかないしろものに改竄された。

いずれにしろ、私たちの企画がテレビ局側のなんの抵抗も受けずにそのまますんなり通り、ブラウン管をとおして家庭の茶の間へ送り出されることなど、まずもって考えられなかった。給料よりも働き甲斐のある仕事を望んでいた当時の私にとって、こうした勤め先での毎日はむなしいの一語に尽きた。それは時には屈辱的ですらあった。けれども私には辞表を叩きつけるほどの勇気はなかったし、同僚の森田のようなかたちで不満を解消する、そういった才覚もなかった。

私より二つ年上の森田は私が入社して間もなく、ある私立大学の大学院で映画理論をまなんでいたところを強引にくどかれてはいってきたのだが、会社同士の力関係に左右される、知性とは縁もゆかりもないこのマス・メディアの世界にはやばやと見切りをつけると、前の年の夏頃から会社の仕事はほどほどにして、余力を若手の放送作家たちと語らってつくったミュージカル研究会に注ぎこむようになっていた。ミュージカル'60と名乗るそのグループの計画は、銘々が書いた台本をメンバー全員で検討して一本にしぼり、作曲家と振付け師それにタレントを外部から招んできて、年に一回の割りで発表会を催すというものだった。

テレビの番組に関係した仕事にたずさわっているおかげで、多少とも芸能界の裏に通じていた森田は、むろんその計画を実現するにあたって並大抵でない困難が付きまとうことぐらい百も承

知だった。例をあげれば、台本よりも何よりも、人件費から公演費用のいっさいを賄ってくれるスポンサーをさがすことが、差しあたっての仕事なのだ。しかし彼はそうした雑事に追いまわされることをいっこう苦にしなかった。苦にしないというより、愉しんでいる気配さえ窺われて、そのためにかえって、ちょっと意地になっているのではないかと勘ぐりたくなってくるほどだった。

森田はすでに結婚しており、新宿と隣合った柏木に部屋を借りて、まがりなりにも所帯を張っていた。その彼と、新宿の繁華街に小さな装身具と小間物の店を出している母の許からかよう私とは、帰る方向がおなじなので自然いっしょに飲む機会が多かった。そうした折、一度私は酔ったあげく、「ヨーロッパのオペラがあってのミュージカルだろ？　いわばミュージカルはアメリカ人の文化的劣等感が産み出したようなもんだ。そういう歴史的条件のととのわないこの国に、ミュージカルが根づくとは思えないがなあ」といったことがある。

すると彼は、そんな言い古された意見など聞きたくもないといったうんざりした顔で、「もちろん模倣さ。純然たるブロードウェイ・ミュージカルの模倣さ。それでいいじゃないか。大体、文化というものはだね、真似を繰り返すことの中から生れてくるもんなんだぜ」

私は苦笑すると、手を振っていった。

「そう開き直られたんじゃ、話にもなにもならないな。ま、とにかく成功を祈るよ。予定では来年の五月頃だろう？」

議論めいたことはにが手なので、私は話を打ち切るつもりでそういったのだが、今度は森田のほうが引き下がらなかった。何のつもりか、彼はこんなことをいい出した。

「突飛なようだがね、恋愛だって模倣なんだ。それが証拠に、この世に独創的な恋愛なんてあり

やしない。本人同士は世紀の大恋愛をしているつもりでも、けっきょくは人類の文化的遺産ともいうべき、先人たちの〝恋愛〟を模倣しているにすぎないのさ。大事なのはミュージカルであれ恋愛であれ、それを何度でも試みることだよ。ものになるかどうかはべつとして、いずれ何とか恰好がついて行くものさ」

ミュージカルと恋愛を一緒くたに論じる森田の心の裡を計りかねながら、私が、

「女たらしの意見として、傾聴に値するな」

と半畳をいれると、彼は不真面目な私の態度をなじるように、ミュージカルがいかに素晴しいかということについて滔々と弁じ立てて、ミュージカルといえば映画で観た『アニーよ銃をとれ』と『王様と私』しか知らない私を圧倒したものだった。

会社の仕事はほどほどにして、といっても森田はけっしてルーズな男ではなかった。朝はどんなに二日酔いの状態のときでも遅刻せずに出社したし、週に何度となく招集される社内会議でも、営業やCM課の連中に伍して積極的に発言した。奇抜なアイデアを出して企画書にまとめるのも速かった。そういう意味では上司から重宝がられもしたし頼もしがられもした。怖れられることさえあった。が、それだけのことだった。彼は何でもそつなくこなしたが、サラリーマンに一番必要とされるあの無邪気さ——会社のために身を粉にして働こうという無邪気さを、いつの間にかまったく放棄してしまったのである。

社内で森田ともっとも親しい私でさえも、ミュージカル'60の仲間からかかってくる電話に、これ見よがしに声高に応じている彼の様子を見ていると、ついサラリーマンの退廃といったことを思って、眉をひそめたくなってくる。

彼が部長秘書の橋本千鶴と肉体関係をもったのも、私にいわせればそうした一種捨て鉢な生き

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

方と無関係ではなかった。

千鶴は色白で、眼許に愛嬌のある、脚のきれいな女性で、私たち若い独身社員の関心の的だった。一年ほど前に或る製鉄会社に事務員として勤めていたところを秘書として引き抜かれてきたのだが、彼女にとって不幸なことは、製鉄会社時代に上司の愛人だったというかんばしくない噂が私たちの間にながれていたことだった。したがって彼女に寄せる私たちの関心には、清純とばかりは言いきれないものが含まれていた。入社二年目の桜井までが、ふざけて「コンチクショー。おれ、一度でいいからあんなお姉さまに抱かれてみたい」などと口走っていたぐらいだから、あとは推して知るべしといったところだ。だが不思議なことに、いつまで経っても、誰かが言い寄ってものにしたという情報が伝わってこない。私はしまいには噂は嘘ではないのか、彼女はひょっとしたら処女かもしれないと思いはじめていた。

その橋本千鶴と寝たというのだから、私はにがにがしく思うより先に、唖然とせざるを得なかった。森田はいった。

「君にはどうせ判ってしまうことだから白状するんだがね、おれはいま橋本千鶴とおかしなことになっているんだよ」

そのとき私たちは、昼休みのひとときを会社の近くの喫茶店ですごしていた。

「橋本さんと？　いや驚いたな。いったいいつのことさ」

「この間の旅行の帰りだよ」

十月の初めに、やがて正月番組の企画で忙しくなるちょっとの暇な時期を選んで、ラジオ・テレビ企画制作部だけの恒例の慰安旅行があった。その帰り、彼女と新宿の裏街にある旅館の門をくぐったのだという。

私は無理に快活さを装っていった。

「それでこの前、恋愛も模倣だなんて妙なことをいったんだな」

「いや、あれとは関係ないよ。第一、今度のことは恋愛なんていうもんじゃない。なにしろ誘ったのは彼女のほうなんだからね、初めっから遊びのつもりだよ」

「ま、それは結構としかいいようがないけど、それにしても何だか四ツ谷の彼女がかわいそうだね。すこしはうしろめたさを感じるだろう?」

四ツ谷愛住町のアパートに住むその女の子は道子さんといって、銀座のバーに勤めていた。森田にいわせれば「勤めさせていた」ということになるのだが、一時期いまはつぶれてしまった或る小さな劇団にいたことがあるというほどの演劇好きで、彼とはおそらくそうした話題をつうじて知り合ったに相違なかった。

私は一度、森田と新宿で飲んだ折に、真夜中ちかく無理やりその部屋へつれて行かれたことがある。私としては彼の奥さんと懇意にしていた手前、ほかの女の部屋へ押しかけるのはどうかと思われたのだが、会ってみるとそんな配慮はどこかへけし飛んでしまった。見るからにしっかり者といった感じの森田夫人とは対照的に、道子さんはほっそりした躰つきの、口数のすくない、なかなか好感のもてる女性だった。その晩、罐詰のコンビーフを肴に飲み直したあと、私は森田をそこに残して帰ってきたが、帰りしなに押入れの蒲団に手をかけながら「酔って帰るのはあぶないわ。折原さん、いまおふとんを敷くから泊まっていらっしゃれば?」といかにも心配そうな口ぶりでいった、彼女のそのときの優しげな表情がそれからいつまでも私の胸のなかに消えずに残っていた。

そんなことがあったので、千鶴と旅館へ行ったと事もなげにいう森田に、私はいささか義憤め

いたものをおぼえずにはいられなかった。

彼は煙草に火をつけると、私をからかうように見て、

「どうして君は物事をそう堅苦しく考えるのかな。橋本千鶴とできちゃったから道子にたいしてうしろめたさを感じなきゃならないということもないだろう。あれはあれ、これはこれさ。それとも、おれを道徳的に許せないとでもいうのかい？」

私は苦笑すると、

「あんたみたいな悪人、いまさら何をいってもはじまらないよ。たぶん僕はあんたに焼き餅をやいているんだと思うよ」

「なかなか正直でいいぞ」森田は上機嫌だった。「おれの見るところ、君は好みがうるさくて潔癖すぎるから、女を取り逃がしちゃうんだな。それであとで切歯扼腕する。そうだ、そういえば――」

彼はそういいかけて、一瞬言いよどんだ。

「なんだい」私は彼の顔を見まもった。

「いつだったか橋本千鶴がへんなことをいってたぞ。あたしが親しくしている社内の男性で、あたしを口説かなかったのは折原さんただ一人だって。どう思うよ。つまり彼女は君を待ってたのさ」

「ほめられているんだか馬鹿にされているんだか、よくわからないな」

私はそういいながら、頬が染まって行くのをどうしようもなかった。彼女に気がありながら――しかも一度はいっしょに日比谷へ映画を観に行ったにもかかわらず、ついに何も言い出せずにむなしく別れてしまったそんな自分の臆病卑怯なさを、森田に見抜かれ軽蔑されているような気

がしたからである。だが、軽蔑されても仕方がなかった。私はいまだに、大学四年のとき小料理屋の手伝い女と中途半端な肉体交渉を一回もったきりの、半童貞ともいうべき状態のままでいたのだった。そしてそのことを癒されない心の傷としていつまでも意識していたせいで、女性にたいしてひどく臆病になっていたのだ。

私は多くの夜を酒場ですごした。

だが、そうすることで昼間会社で面白くない想いをしていることの鬱憤ばらしをしようなどという気持はさらさらなかった。だいいち私は酒の酔いで憂さが晴らせるとは思っていなかったし、それでなくとも酔いがさめた瞬間の後味のわるさを考えると、そんな精神衛生法はまっぴらだという気がした。何よりも酔いがもたらす自己憐憫ほど、人を卑しく見せるものはないと私には思われた。

要するに私は酒場のようなにぎやかな場所が好きなだけだった。そこで自分の善良さが認められ、周囲の人たちと礼儀正しく友達付き合いができるのが好きなだけだった。スタンド・バー鳥籠に足繁くかようようになるまで、私は旧赤線地帯の近くにあるノーブルの常連だった。マダムのほかにバーテンと女の子が二人いるだけの、床板がぎしぎし軋むうらぶれた感じの酒場だったが、そこにいると私はほっと落ち着くことができた。

もっともそこのマダムは、労働争議で職を失ったもと映画監督の旦那の影響で左翼思想にかぶれており、給料では足りなくて、母親の金を持ち出しては酒場に入りびたる〝意識の低い〟私には、何となく背中がくすぐったくなってくるような相手だった。彼女はよく私にいったものだ。

「折原さん、広告代理店なんてやめちゃいなさいよ。お母さんのお店を継げば食べて行けるんですもの、なにもわざわざ資本主義の走狗になってることはないじゃないの」

無邪気といえば無邪気な女だった。だが彼女は器量といい、客あしらいの巧さといい、申し分ないマダムだったので、私は誰にも煩わされずに飲める場所としてちょいちょい利用したのである。森田とも会社の帰り、よく立ち寄ったものだった。しかし、ここの馴染み客が私のことを「育ちのいい好青年」と噂し合っていたというのはどういうことだろう。これは店の女の子が打ち明けてくれたのだが、私にはさっぱり見当がつかなかった。

育ちがいいなんてお笑い種だが、それがかりに私が苦労らしい苦労を知らないできたという意味ならば、当たっていないこともなかった。私はものごころつかないうちに、ひとりっ子のまま日華事変で父をなくしていた。だが、幸運にも、二十五年間というものを大してみじめな想いをしないですごしてきた。これはひとえに、やがて三十になろうとするときに未亡人となった母の努力に負っていた。サラリーマンの妻という、裕福ではないが気楽な身分を剝ぎとられた母は、戦前は高田馬場に文房具屋を（彼女は当時を思い出すと、よく貧乏具屋といって笑った）、戦後は街娼や浮浪者が露地にあふれる新宿の街なかに装身具と小間物の店をひらいて、女ひとりの難儀な歳月をしのいできた。いわばそんな母の奮闘ぶりを日常つぶさに眺めて育ってきた私だが、だからといって母の苦労を自分のそれにすり替えて他人にひけらかすような真似をする気にはなれなかった。私がしあわせだったのは事実だし、第一そんなことをして、息子にみじめな想いをさせないことをひとつの指標として生きてきた母の誇りを傷つけたくはなかった。

私にとって唯一の苦労ともいえる終戦前後のひもじさの経験も、私ひとりの専売特許ではなかったから、正しい意味での苦労とはいえなかった。いってみれば私は、人に輝かしい将来を約束するらしい「逆境」から完全に閉め出されていたわけだった。

しかし当然のことに、そうした静穏な境遇に苛立つこともないではなかった。青年は安全な株

を買ってはならないといった式の言葉に刺戟されて、私は時どき、与えられるのではなく、奪うものとしての烈しい人生を胸に想いえがくことがあった。が、そのたびに、何かにつけて引っこみ思案で、安全第一を旨とする自分に、そんなはなばなしい毎日が訪れるはずがないと考え直して、もとの殻に閉じこもるのを常としてきた。

その年の元旦、私は二日酔いとまではいかないが、かすかな嘔き気が喉もとを窺ういつものあの不快な気分で目醒めた。前の晩、スタンド・バー鳥籠でマダムの佐和子と調子にのってバカ飲みした酬いだった。

二日酔いにならなかったのは、きっと帰りしなに振舞われた雑煮のおかげだろう。大晦日ということで所帯持ちの年輩客は顔を見せず、気ごころの知れた若い客ばかりで愉快に飲めたこともさいわいした。剽軽者の珠子のリードで螢の光を合唱したり、ドアを開け閉てするわずかな場所を利用して、客の一人ひとりが佐和子と踊ったりして騒いだ。うまく踊れないのに、私も佐和子の誘いに応じていい加減なステップを踏んだ。そして、どさくさにまぎれて唇を合わせた。それは私が何年ぶりかで味わった女性の皮膚の感触だった。

家まで歩こうと思えば歩ける距離をタクシーを拾って帰ってくると、いちどきに酔いが出てきた。私の瞼の裏に、唇を盗んだとき「まア、不良ね」とでもいいたげな、いたずらっぽい目をして私を見つめた佐和子の顔がちらついた。街灯の明りに腕をかざして時計を見ると、すでに二時をまわっていた。ハッピー・ニューイヤー！　もう元日というわけだ。そういえば、はやくも明治神宮で初詣をすませてきたらしい人影が、破魔矢を手に街路の向う側をうそ寒そうにそそくさと通り過ぎて行く。ふだん酔っぱらいに連れてこられたキャバレーやバーの女たちで賑わう終夜

试读结束：需要全本请在线购买：　www.ertongboo